

児童生徒が道徳的価値の自覚を深めるための道徳の時間（２）

体験活動と道徳の時間の関連を図る

道徳研究会議

研修員 南雲 和子（川崎市立東橋中学校）

小林 祐子（川崎市立小田小学校）

高村 恒子（川崎市立桜本中学校）

堀田 靖子（川崎市立川中島小学校）

研修指導主事 行川 博幸

主題設定の理由

道徳研究会議では、平成13年度から研究の仮説を

道徳の時間にねらいとする価値内容と体験活動における「気づき」を関連させることで、児童生徒の道徳的価値の自覚が深まるであろう。

として研究を進めてきた。この仮説から総合的な学習の時間における体験活動と道徳の時間を関連させ、検証授業を行った。体験活動後に「道徳的な課題を追求していく場」として道徳の時間を設定した。その結果、道徳の時間に、体験活動における気づきを想起させ、ねらいとする価値内容について話し合うことで道徳的な課題が追求され、道徳的価値の自覚を深めさせることができた。

今年度は、道徳の時間を体験活動の前に設けることによって、その後に行われる体験活動の意味を自分なりに考え、体験活動に課題を持って向かい、この課題の解決に向けた体験活動が可能となると考えた。体験活動のあとに再び道徳の時間を設け、話し合い活動を行うことで道徳的価値の自覚がさらに深まることを目指し、今年度は、道徳から体験へ、さらに体験から道徳へという検証授業を行い、児童生徒の道徳的価値の自覚の深まりを検証していくことにした。

研究の内容

1. 研究の方法

児童生徒の道徳的価値の自覚を深めるために、道徳の時間を体験活動の前後に1時間ずつ設けた。道徳の時間の果たす役割は異なるが、2時間目の道徳の時間には、道徳的価値の自覚がさらに深まりより確かな道徳的実践力が身につくと考えられる。

道徳の時間 道徳的な課題を形成する場

道徳の時間は体験活動の前に設けられ、道徳的価値に気づき自己の道徳的な課題を形成していく場となる。その後に行われる体験活動の意味を自分なりに考え、体験活動に課題を持って向かい、この課題の解決に向けた体験活動が可能となる。

総合的な学習の時間における体験活動

体験活動では、それぞれの児童生徒が発見、疑問、驚き、反省、喜び、感動などを感じる。それらを「さまざまな気づき」ととらえる。体験することによって、道徳の時間に考えていた自己の道徳的な課題が、実感を伴った新たな道徳的課題として形成される。

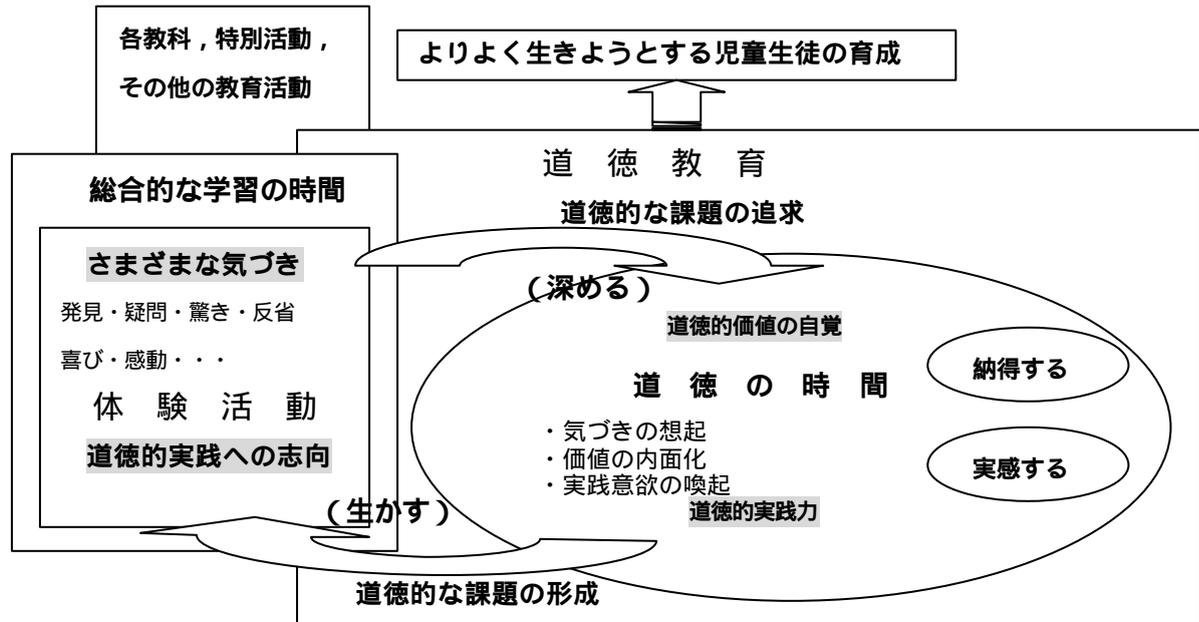
道徳の時間 道徳的な課題を追求する場

道徳の時間は体験活動のあとに設けられ、体験したことで「さまざまな気づき」として感じた道徳的な課題を追求していく場となる。体験活動における気づきを想起し、ねらいとする価値内容について話

し合うことで道徳的な課題が追求される。さらに道徳的価値の自覚が深まりより確かな道徳的实践力が身につく。

それぞれの時間が果たす役割を以上のように捉え、道徳 体験 道徳という流れで検証授業を行った。

道徳的価値を自覚するとは、道徳的価値を 理解すること、主体的に把握すること、実践しようとする意欲を喚起することである。3点のうち、道徳的実践への意欲が喚起された段階を道徳的価値の自覚が深まった姿ととらえた。本研究会議としては、「実践しよう」「実践したい」という「道徳的実践への志向」が文章や発言に表れた姿ととらえ、分析を進めていくことにした。



< 「総合的な学習の時間」における体験活動と「道徳の時間」の関連図 >

2. 「道徳の時間」と「総合的な学習の時間」における体験活動の関連を図った検証事例

検証事例 1 4 - (8) 国際理解 (小学校5年生)

道徳の時間 では、「ブラジルからの転入生」という資料から「ブラジル人だから当然サッカーがうまいだろう」という私たちが陥りがちな先入観について考えさせた。日本人にもいろいろな人がいるように外国人にもいろいろな人がいるということについて感想を中心に話し合わせた。

体験活動では、ALT とのゲーム等を行い、その後クラスに招いて一緒に給食を食べた。活動の最後にALT が「人間は、違うように見えてもみな同じ」という内容の話をしてくれた。

道徳の時間 では、「もうひとつのふるさと」という資料で話し合い活動を行った。ホームステイ先で失敗した少女が謝罪の気持ちを何とか伝えようとする姿を通して、「人間は言葉ではなく心で分かり合うことが大切である」ということについて考えさせた。

道徳的価値の自覚の深まり

道徳的実践への志向が表れている表現を、児童の発言や振り返りカードから探った。

道徳の時間 の発言・振り返りカードから

- ・ブラジル人だからサッカーがうまいと決めつけた(のはよくない)。
- ・想像でこういう人だと決めてはいけない。
- ・人はそれぞれ違う。
- ・外国の人だからという理由で期待して、はずれたからといってもその人を責めるのはおかしい。

体験活動の振り返りカードから

- ・最初は（ALT を）どんな人だろうと思ったけれど、会ったら楽しかった。また会えるといいな。
- ・どんな人かなと思ったら話しやすい人だった。また来てほしい。
- ・明るくて優しい人だったから、給食を食べるときお世話をすることができた。
- ・最初は言っていることがよくわからなかった。でも最後には心をこめて握手をしてもらった。

道徳の時間 の発言・振り返りカードから（謝罪の気持ちが伝わったことについて）

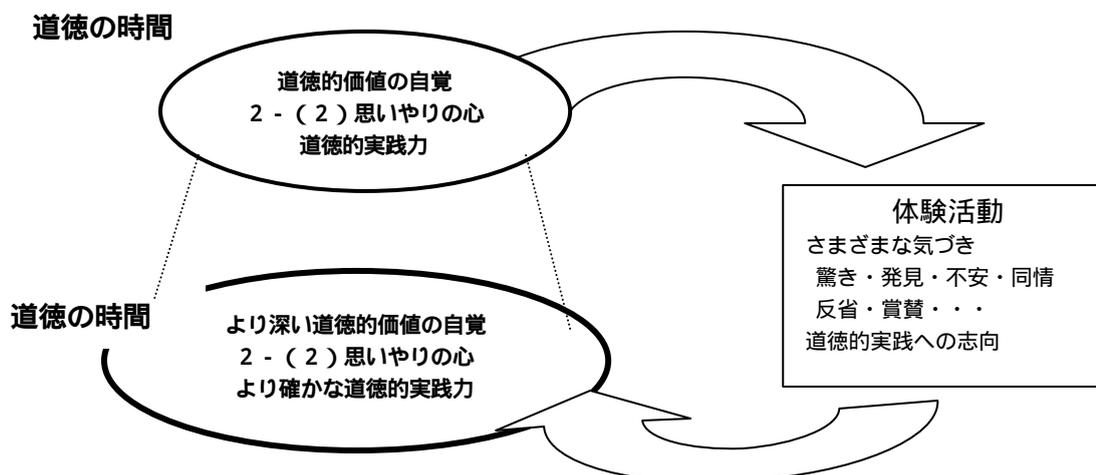
- ・謝りたいという気持ちがいっぱいあったから。
- ・辞書を見せてごめんなさいという文字を悲しそうに見せたから。
- ・心でわかりあおうとしたから。
- ・ALT とも言葉は通じなかったけれど友達になれた。心はみんなおんなじ。

考察

道徳の時間 では、外国人だからという理由で先入観を持って見るのはよくないという発言や記述が大多数を占めた。しかし、実際に ALT との活動の前には、外国人だけれど大丈夫だろうか、どんな人だろう、言葉がわからなかったらどうしようという不安が先に立っていた。ところが活動を行ってみると ALT の言っていることをよく聞いて理解できたし、身振りなどで何とか自分の言いたいことを伝えることができた。この体験活動での「人間は、言葉が全て通じなくともわかりあえる」という「気づき」を想起し話し合うことで、道徳の時間 では、「心でわかりあえる」ということを実感することができた。今後、外国の人と接するとき「言葉が全て通じなくても気持ちがあれば伝わる」という内容の記述を18名の児童がしている。また、24名中21名の児童が、もし言葉が通じなくとも、どうしても伝えたいことは、身振りや表情など工夫して意思を伝えると述べており、道徳的実践への志向が読み取れる。このことから道徳的価値の自覚を深めることができたと考えられる。

検証事例2 2 - (2) 思いやりの心 (中学校1年生)

<道徳の時間と体験活動の関連図>



道徳の時間 では、視覚障害者に対してどのように接すればいいか問いかけた。そうしたところ「助けてあげる」「教えてあげる」という発言が36名中21名の生徒に見られた。これは手助けが必要であるという先入観に基づいた発言であると考えられる。あくまでも健常者の側から見た一般論的な、ともすると自己満足とも取れる発言である。しかし、この道徳の時間で視覚障害者についてより深く考えるという意識の共通化が図られ、自分なりの道徳的な課題が生まれた。

体験活動では、アイマスクをして格技場の中の障害物に気をつけながら歩く、アイマスクをしてサッカーボールを蹴る等の体験を行った。ほぼ全員の生徒が真剣に取り組み1時間目の道徳の時間を意識し

た体験活動であった。

道徳の時間 では、ビデオ「盲目のイレブン・汗と涙の記録」を見たあと感想を話し合わせた。視覚障害者に対する自分たちの概念が覆され、自分たちと変わらない生活をしていることやそのための並々ならぬ努力について賞賛の声が多くあがった。終末に盲学校の生徒の作文「ちょっと手を貸してくれませんか」を読み聞かせた。すると、生徒から「相手のことをまず一番先に考えなければならない」「むやみに何かしてあげようとするのはかえって迷惑」「見守ることが大切」など、相手の立場にたった発言が聞かれるようになった。「何かしてあげる」という自分が優位にたった考え方から、相手を対等の関係としてとらえ「困っているときには手を貸す」といういわば人間として当たり前の行為へと考え方が変化してきた。

道徳的価値の自覚の深まり

道徳の時間 と の振り返りカードを比較してみると、「視覚障害者とのように接したらよいと思いますか」に対して、1時間目は「～してあげる」記述が21名もあった。それ自体、中学1年生らしい素直な思いやりから出る考え方であると思われる。しかし、体験活動後、2時間目の道徳の時間には「～してあげる」という記述は2名と激減した。体験活動でのさまざまな気づきを想起して話し合うことで、障害者の立場にたった考え方ができるようになった結果であると思われる。

<視覚障害者への接し方>

道徳的实践への志向として捉えられる表現を、道徳の時間 と の振り返りカードの記述から抽出した。ほぼ全員の生徒に変化が見られるが、抽出した10名からは、第一に相手のことを考え相手のして欲しいことをするという姿勢が読み取れる。これは誰に対しても当てはまることであるが、あえて障害者への接し方として尋ねてもこのような結果となった。

障害者には手助けが必要という先入観が取り払われ、人間としての当然の行為を生む思いやりの心が芽生えたと考えられる。

	1時間目	2時間目
A	「～しましょうか」など温かく接したい。	まず第一に障害者のことを考えそれが相手にとって本当に必要なことかどうかを考えて行動したい。
B	自分にできることはやってあげる。	まず様子を見て何かに困っていたら助けたいと思う。
C	信号や道を教えたりして困らないようにしてあげる。	視覚障害者が気持ちよく行動できるようにしたい。
D	無視する。関わらない。	まずは見守る。困っていて一人ではどうしようもなくなったら手を貸す。
E	助けてあげる。例えば時間を教えてあげたり・・・。	目の見えない人にはなんでもしてあげたほうがいいと思っていたが、困ることもあるんだと思った。
F	助けてあげたい。	よかれと思ってやったことでも迷惑になってしまう場合もあるので困っていたら手伝う。
G	近くに障害物があったらどけてあげる。	相手が不安に思わないように接する。
H	信号で危なかったら声をかけてあげる。	私たちがこれなら安心だと思ってやっていることも目の見えない人には不安に感じることもあるから(接し方を)勉強したほうがいい。
I	とにかく助けてあげる。	どう接すればよいか、迷惑でなく助けられるか考えていきたい。
J	信号待ちをしていたら声をかけてわたりきるまで手を引いてあげる。とにかく困っていたら声をかける。	今までは手を引いて歩いたり何かをすれば役に立てると思っていただけで、まずは何か話しかけて何をすればいいかを聞いてみる。

さらに著しく変化のあったA、D、Jの3名の生徒に、授業終了後インタビューをした。3名とも最初に考えていた障害者のイメージは、「助けてあげる人」であった。しかし、体験活動によってその苦労や心情について「さまざまな気づき」が生まれ、思いがはせられるようになった。最後に道徳の時間

で、気づきを想起し話し合うことで障害者の姿や気持ちに触れ、全てにおいて助けが必要なのではなく、必要としていることに対して手を貸すのが本当の思いやりであるという考え方ができるようになり道徳的实践への志向として捉えられた。

生徒へのインタビュー

生徒の発言	目取り
<p>最初の授業のとき障害者との接し方を考えたけど、2時間目のときにビデオを見たり作文を聞いたりして、障害者との接し方で何か変わったことはありますか？</p> <p>J プリントとかを見る前は、手をひいてあげたり何かをすれば役に立てると思っていたけど、手をつかまされると困ると思う人がいて驚いた。わたしはまず話しかけて何をすればいいか聞いて相手が欲しいことをすればいいと思った。</p> <p>A 町とかで見かけて目が見えなかつたりしてもすぐに強引に手伝いをするんじゃないくて、普通の人に対してのように声をかけて何か手伝ってほしいことはないか聞いたり、それをどうやって手伝ったりすればいいかをきいたりしてから手を貸せばいいと思った。</p> <p>D 自分に声をかけてくれるまで待つ。</p> <p>最初からみんな今までみたいに思っていましたか？</p> <p>D 無視する、関わらないと思っていた。でもビデオを見たときにキーパーをやっている矢口君がすごいと思ったから。変わった。</p> <p>A やっぱり総合でそういう人たちと同じような体験をして、それが思った以上に怖かったり不安だったりしたから、障害者に対する気持ちが体験してみても変わった。</p> <p>D ビデオを見て怒られても絶対にやめないって言う矢口君がすごいと思ったから。むやみに声をかけると迷惑なこともあるし、考えてから行動しようと思った。</p> <p>A 体験をする前までは、目が見えなくて盲導犬を連れていたり杖をついて歩いたりして、そういう人たちは自分達が体験していないことを毎日体験しているということがよくわかった。まえにふざけて目をつぶって道を歩いたりしたことがあったけど、すぐ開けてしまった。改めてアイマスクをつけて体験したらちょっと怖かった。体験して自分にとってはプラスになった。</p> <p>J ビデオを見てわたしたちが普通にやっていることを努力してできるようになってすごいと思った。体験がなかったらビデオを見ても目が見えない人たちの気持ちがわからなかった。</p> <p>全体の感想を述べてください。</p> <p>A 自分の中にあった視覚障害者のイメージが3時間の授業を通して変わった。ほんとはかわいそう気の毒と思っていたけど、視覚障害者の人は頑張って生活している。努力しているのだからかわいそうって思っていると、その人たちが助けを求めているときにやってもらって嫌なことを強引にやるかもしれないから、その人の手助けをする前にどんなことをして欲しいかとか聞いてから手を貸そうと思う。</p> <p>D 目が見える人の生活と目が見えない人の生活が似ていたからすごいと思った。</p> <p>J 今回、視覚障害者についていろいろ考えることができてよかった。これからの生活に生かしていきたいと思う。</p> <p>町を歩いていて白い杖を持っている人と出会ったらどうしますか？</p> <p>A まず障害者としてでなく普通の人と変わらないようにみて、その人が何か困っているようだったら何か手伝うことはありませんかと声をかけ、言われたらすぐ行動に移すのではなくて、どのように手助けをしたらいいかをちゃんと聞いてから行動に移す。</p> <p>D その人に声をかけられるまで待ってあげる。声をかけられたら助けてあげる。</p> <p>J 先ず自分が邪魔にならないようにその人の前に人がいっぱいいたら危ないですよと周りの人に声をかける。その人が困っていたら声をかけて手を貸す。</p> <p>A 今は簡単に口で言ってるけど、実際には知らない人に声をかけるのは勇気があることだと思うけど、人助けがしたいから勇気を出してやろうと思う。</p> <p>J 一人だとわからないけれど友達と一緒にいたら声をかけられる。</p> <p>D やれる！！</p>	<p>自分中心の考え方から相手の立場にたった考え方へ変化した発言。</p> <p>障害者として接するのではなく、対等の人間として接するという考え方へ変化した発言。</p> <p>自分とは関係ないという考え方から、相手を尊重した考え方に変化した発言。</p> <p>障害者に対する先入観的なものが、体験をしたことで全て思っていた通りではないことに気づいた。その後の道徳の時間で気づきをもとに道徳的価値の自覚を深めていった。</p> <p>障害の有無に関わらず必要としている人に手を貸すことが本当の「思いやり」であることへの気づき。</p> <p>道徳的实践への志向</p>

考察

「道德の時間」の振り返りカードから障害者への接し方について、相手を尊重した記述がほぼ全員の生徒に見られた。インタビューでの、今後実践できるかという問いかけに対しても、相手を尊重して手助けしたいという意欲が感じられる発言をしている。このようなことから道徳的实践への志向が読み取れ、道徳的価値の自覚が深められたと考えられる。

研究のまとめ

1. 研究の成果

本研究会議では、「道德の時間」、「体験活動」、「道德の時間」という流れで検証授業を行ってきた。「道德の時間」で喚起された実践意欲が「体験活動」では道徳的实践への志向として生かされる。そして、その「体験活動」で「さまざまな気づき」が生まれる。それを想起して価値項目と関連させ「道德の時間」で話し合うことで、道徳的価値の自覚が深められる。

2本の検証授業では、振り返りカード、発言、インタビューなどから「道徳的实践への志向」を検証することができた。本研究会議では、道徳的価値の自覚が深まった姿を「道徳的实践への志向」ととらえており、この視点で発言や記述の内容を見ると、道徳的価値の自覚を深めることができたと考えられることができる。

2. 今後の課題

見取りの方法

昨年度、道徳研究会議では道徳的価値の自覚の深まりを、児童生徒の発言、振り返りカードから捉えてきた。しかし、客観性については検討の余地が残った。そこで、本研究会議では、検証授業において生徒を抽出しインタビューを行うことで、授業中の発言等の真意を補足することを考えた。小中学生の段階で、自分の考えを適確に言葉で伝えることは大変難しい。インタビューでは、少人数で聞き取りを行うためリラックスして自分の考えを説明することができたようである。今後は、検証結果により客観性を持たせるため道徳性発達理論等の研究を合わせて進めていくことが望まれる。

関連の有用性

「道德の時間」と総合的な学習の時間における「体験活動」を関連させる場合、どの価値項目とどんな「体験活動」を関連させることで有用性が高まるかということについて研究を進めていかななくてはならないと思われる。小中学校15から23項目の価値項目全てと「体験活動」の関連を図ることはどんなに計画性を持っても不可能である。有用性の高い関連のさせ方を厳選するためには、各学校で多くの授業を行い、検証事例として持ち寄って有用性を検証していくことが必要である。

最後になりましたが、研究を進めるにあたり適切なお助言をいただいた先生方、検証授業にご配慮をいただいた校長先生ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|-----------------------------|-------|
| 『小学校学習指導要領解説 道徳編』文部省 | 1999年 |
| 『中学校学習指導要領解説 道徳編』文部省 | 1999年 |
| 七條正典『生徒の心に響く道徳授業の進め方』東洋館出版社 | 1999年 |

【指導助言者】

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 川崎市立小学校道徳教育研究会長（川崎市立菅生小学校長） | 田中 憲生 |
| 川崎市立中学校教育研究会道徳教育部会長（川崎市立南生田中学校長） | 横溝 達夫 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事 | 大井 澄子 |